



はやり唄はその時代を映す鏡といわれますが、持ち込まれたあるひとつの唄から展開していった、時代の姿を紹介します。

「原野谷川杭打ち唄」がいつから歌われどんないわれがあるのか知りたい、との調査相談が寄せられました。その歌詞は

さあさ皆様 (ハイハイ)

やりましょうじゃないか (トコザンザ、チョイトザンザ)

相も変わらぬ杭打ちを (ヨーホイドッコイショ)・・・と続きます。

「静岡県の民謡」(k388)を手にとってみるとこの本は、静岡県教育委員会が「自然発生的に起こり伝承されてきた生活の唄を保存伝承するために、各地の調査員が聞き取り記録したもの」ということです。調査票が保存されているとのことで、その中にないかと県の文化課に調査を依頼し、さらに回答を待つ間民俗芸能研究会による本、おなじみの「掛川市史」、「天竜川」(388)などを読み調査を続け、次のことが分かりました。

- ・ お囃子 「トコザンザ」 → 天竜川の堤防工事の際歌われている。二俣から下流の遠州平野に集中。
- ・ 歌詞 「さあさ皆様・・・」 → 磐田市豊田に伝わる「仕事始めの唄」に酷似。

原野谷川・逆川の河川改修工事が本格的に始まったのが大正8年から昭和2年頃のことです。そんな折待っていた「文化財保護班」からの回答もいただき、依頼していた唄は昭和2、3年頃に歌われていた「杭打ちの唄」で、幡鎌・本郷で採取された歌詞が記録されているとのことでした。

以上のことを総合し、この時代河川工事が大きな政策であり県内には大勢の「川人足」さんたちが各地から集まってきたこと、「ザンザ節」と「仕事始めの唄」のミックスのようであるなどの回答をしました。

このような杭打ち唄は掛川だけでも数曲あり、歌詞の内容もそれぞれ違います。つきつめればつきつめるほど深みにはまりそうです。歌詞だけをいくつもいくつも見ていくとメロディーも聴いていないのに、厳しい仕事に立ち向かう当時の名も無き人々の力強い歌声が今にも沸き上がってくるようでした。(担当：F)



掛川・大須賀館 新着図書案内



『わが闘争』	角川春樹 著	イースプレス	(自叙伝)
『福音の少年』	あさのあつこ 著	角川書店	(小説)
『サウスハズバンド』	奥田秀朗 著	角川書店	(小説)
『ええじゃないか17歳のチャレンジ』	宗田 理 著	角川書店	(小説)
『震度0』	横山秀夫 著	朝日新聞社	(小説)
『ひとりずもう』	さくらももこ 著	小学館	(エッセイ)

第133回 芥川賞

『土の中の子ども』	中村文則 著	新潮社
-----------	--------	-----

第133回 直木賞

『花まんま』	朱川湊人 著	文藝春秋
--------	--------	------

* 貸出中の本は、予約できます。お気軽にカウンターまでどうぞ。

